

教職大学院におけるFD活動の試み

-授業アンケートの結果に基づく授業改善に向けた取組-

The Practice of Faculty Development in the Professional School of Teacher Education

: The analysis of the Survey by Questionnaire about training in college classes

吉原 寛・成田 頼昭・大瀬 幸治・中谷 保美

Hiroshi YOSHIHARA, Yoriaki NARITA, Yukiharu OHSE, Yasumi NAKAYA

敦川 真樹・古川 郁生・瀧本 壽史・三上 雅生

Masaki TSURUKAWA, Ikuo KOGAWA, Hisafumi TAKIMOTO, Masao MIKAMI

吉田 美穂・森本 洋介・菊地 一文・福島 裕敏

Miho YOSHIDA, Yousuke MORIMOTO, Kazufumi KIKUCHI, Hirotohi FUKUSHIMA

小林 央美・中野 博之

Hiromi KOBAYASHI, Hiroshi NAKANO

弘前大学大学院教育学研究科

Graduate School of Education, Hirosaki University

要 旨

本稿は、弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻(以下、本教職大学院と記す)で実践されたFD活動のうち、授業アンケートの結果をもとにして行われた授業改善の取組について、紹介・分析することで、授業改善の視点を明らかしようとする試みである。本教職大学院における必修科目に対して教員に求められる4つの力(自律的発展力・協働力・課題探究力・省察力)を測定する授業アンケートを実施し、その結果をもとに、FD研修会において授業担当者が4つの力の視点で考察を行った。さらに、授業担当者の考察を本教職大学院の全教員が協議し、共有することで各授業に対する授業改善の視点を明らかにすることができた。今後は、授業アンケートの内容の精緻化を図り、院生が授業で身に付けた専門性を適切に測る一方で、教員がよりよい授業改善を行うために、4つの力の視点からFD活動を積極的に実施していくことの必要性が確認された。

キーワード: 授業改善, 授業アンケート, FD活動, 教職大学院

1. はじめに

本稿は、弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻(以下、本教職大学院と記す)で実践されたFD活動のうち、授業アンケートの結果をもとにして行われた授業改善の取組について、紹介・分析することで、現状と課題を明らかしようとする試みである。

本教職大学院は、2017年4月に設立された比較的新しい教職大学院である。1学年の定員は16名で、現職教員院生を対象としたミドルリーダー養成コースと、学部卒院生を対象とした教育実践開発コースの2つの

コースから成る。

本教職大学院は、理論と実践との往還・融合を通じた省察をもとに、青森県が直面する教育課題の解決をめざした教育実践を創造し、リードしていく教員を養成することを目的として、「教員に求められる4つの力(自律的発展力・協働力・課題探究力・省察力)」(図1)を掲げてその育成に重点を置いたカリキュラムを編成・実施している。

教員に求められる4つの力はそれぞれ次のように定義される⁽¹⁾。

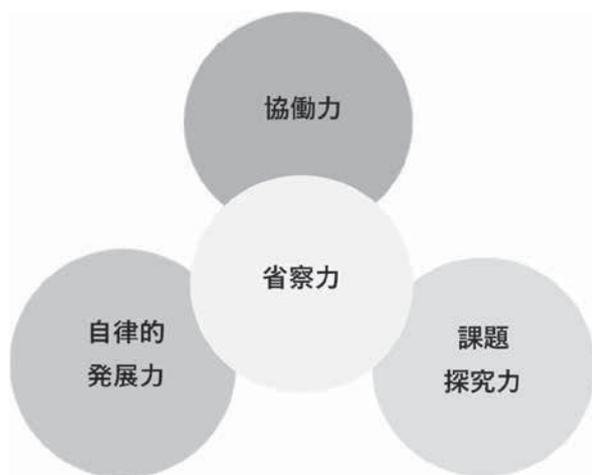


図1 教員に求められる4つの力

- ・「自律的発展力」…自らの到達点と新たな課題を明らかにし、その課題解決を目指してさらに職能成長を遂げていく力
- ・「課題探究力」…課題を発見し、多元的に分析を行い明確にしたうえで、課題解決に向けた実践をデザインし取り組んでいく力
- ・「協働力」…あらゆる教育実践場面において、子どもを含めた関係する他者との柔軟で創造的な関係性の構築と協働する力
- ・「省察力」…実践や自己の学習過程において、何をどのように捉え、思考し、判断し、実践し、評価したかについて、状況や理論、事実をもとに振り返る力

これらは、中央教育審議会（2015）において、これからの時代の教員に求められる資質能力として、(1) 自律的に学ぶ姿勢を持ち、時代の変化や自らのキャリアステージに応じて求められる資質能力を生涯にわたって高めていくことのできる力や、情報を適切に収集し、選択し、活用する能力や知識を有機的に結びつけ構造化する力、(2) アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善、道徳教育の充実、小学校における外国語教育の早期化・教科化、ICTの活用、発達障害を含む特別な支援を必要とする児童生徒等への対応などの新たな課題に対応できる力量、(3) 「チーム学校」の考えの下、多様な専門性を持つ人材と効果的に連携・分担し、組織的・協働的に諸課題の解決に取り組む力、という3つの資質能力の内容が明示されたことを受けたものである。これについて、さらに、OECD・DeSeCo計画において提唱される、知識基盤社会への移行に対応する「キー・コンピテンシー」は、人々が振り返って考える力（省察力）を中核として、3つの

広域カテゴリー（自律的に活動する力、異質な集団で交流する力、知識・技能など様々な道具を活用し環境と効果的に相互作用する力）から構成されていることを参考にして再度構築した概念と考えられる。すなわち、中央教育審議会答申がこれからの時代の教員に求められる資質能力として掲げる3つの資質能力—「自律的発展力」、「課題探究力」、「協働力」—のそれぞれと相互に作用し合う力として、「省察力」が中軸となるように、これらを4つの専門性として位置付けたものと理解できる⁽²⁾。

本教職大学院における授業は、この4つの力の育成を目指したものでなければいけない。授業担当者は、日々の授業において、如何にして4つの力の伸長を目指すのかを意識しながら授業計画を立てなければいけない。また、授業実施後も振り返りが求められる。

一方で、大学における自己点検・自己評価による授業改善の取組は徐々に整備され、FD (Faculty Development) 活動として、各大学で積極的に行われるようになってきた。本教職大学院においても、開設以来FD担当部会を中心に定期的にFD活動を実施してきた。FD活動として、行うものは以下のとおりである。

- ・ 院生による授業評価の実施とそれに基づく授業改善
- ・ 本専攻の授業の定期的公開とその後の授業研究会の実施（教育委員会及び連携協力校の教員も参加）
- ・ 本専攻の教員が全員参加してのFD研修会の実施
- ・ 本専攻の教員と院生との懇談会の実施

本稿では、これらのFD活動のうち、院生による授業評価の実施とそれに基づく授業改善のためのFD研修会について取り上げ、現状と課題を明らかにしていく。

院生による授業評価については、FDの手段として、各教職大学院で実施されている。多くの教職大学院は、主として授業アンケートを実施することで院生による授業評価を行っている。しかしながら、例えば、片山・宮野（2010）が紹介する京都教育大学教職大学院の授業アンケートでは、授業のねらいに対する達成度、授業方法の適切さ、満足度など授業内容やカリキュラム全般に対する質問項目が一般的になっている。また、石上・山崎・原田・渡辺（2010）が紹介する静岡大学教職大学院の授業アンケートでは、授業内容に加えて、教員として身に付けてほしい専門性について尋ねているが、単独の項目で訊いており理論的なコンピテンシーについての質問項目は採用されていない。

本教職大学院では、前述のように教員に求められる資質能力として4つの力を掲げている。授業アンケー

トについても、コンピテンシー・ベースで4つの力がどの程度修得できたのかという点について、授業評価を求めることにより、授業改善の方策を考える視点としたいと考える。

三浦・上野・吉原（2019）では、本教職大学院の授業アンケートを紹介しており、4つの力の資質能力を問う質問項目による授業アンケートの成果や課題を検証している。

三浦ら（2019）では、本教職大学院の「授業アンケート」の特徴として、次の2点を挙げている。第1は、「単に授業者の行動を院生が評価するという、いわばモニタリング調査として「授業アンケート」を実施するのではなく、院生が授業内での院生自身の行動を内省し、その内省の態様に基づいて、教員が当該授業における自らの実践を顧みることを促すという点」、第2は、「教職大学院の教育課程において院生がどのような知識や技術を修得できたのかという点について自由記述を求めることは、院生による学びの定性的な側面の把握に寄与するが、この「授業アンケート」では、併せて、養成すべき教員の専門性を院生がどの程度修得できたと認識しているのか、定量的な側面からの測定も試みることとしている点」である。このことから、本教職大学院の授業アンケートは、院生の教員としての専門性の修得状況の把握に寄与することができ、授業担当者にとって自己の授業を振り返るための指標とすることができるものと考えられる。

三浦ら（2019）では、定量的なアンケート結果をもとに、カリキュラム構成と授業アンケートの内容の双方に対する全体的な考察を加えているが、授業アンケート結果を受けて、授業担当者がいかなる考察を行ったのかという点については言及していない。授業アンケートの結果を授業担当者がどのように受け止め、考察することで授業改善がさらに一歩進むことが考えられる。

本稿では、本教職大学院における授業担当者自らが、アンケート結果を受けてどのような考察をしたのか、実際に授業改善にどのように生かしたのかといった情報を共有することが、本教職大学院のFD活動の特徴と言えることから、そうした特徴に注目してFD活動を紹介することで、FD活動に新しい視点を提供したい。

2. 授業アンケート結果に基づいたFD活動

(1) 対象となる授業科目

本稿では、1年次前期に、ミドルリーダー養成コース院生と教育実践開発コース院生が共通で履修する授業を対象に行った授業アンケートを分析することとす

る。対象となる科目は以下のとおりである。

〈基礎科目〉20単位

①教育課程の編成・実施に関する領域

「教育課程編成をめぐる動向と課題」、「教育課程の開発と実践」

②教科等の実践的な指導方法に関する領域

「学びの様式と授業づくり」「教科領域指導研究」

③生徒指導、教育相談に関する領域

「生徒指導の理論的視点と実践的視点」「教育相談の理論と方法」

④学校経営、学級経営に関する領域

「学校安全と危機管理」「教育経営の課題と実践」

⑤学校教育と教員の在り方に関する領域

「教育における社会的包摂」「現代の学校と教員をめぐる動向と課題」

〈独自テーマ科目〉4単位

地域の教育課題の解決に必要な知識とその実践方法について理論的に学ぶとして、本学が青森県教育委員会の要望に基づき独自に設定するもの。

「あおもりの教育Ⅰ（環境）」「あおもりの教育Ⅱ（健康）」

(2) 「授業アンケート」の内容

各授業を振り返り、院生自身の教員としてのキャリア形成にあたり有意義であったと考えられる事柄や、授業の進め方・取組に関して良かった点、改善してほしい点について記述を求めたほか、本学教職大学院において教育上の理念として掲げる、「教員に求められる4つの力」（「自律的発展力」「協働力」「課題探究力」「省察力」）が、各授業の中でどの程度修得できたかという点について、各科目に共通の測定指標を設定し、院生による回答を求めた。「教員に求められる4つの力」の指標は三浦ら（2019）で記載されている指標を用いた。各項目について「1.まったくあてはまらない」～「6.非常によくあてはまる」の6段階で回答を得た。

(3) 教員の考察

授業アンケートの結果をもとに、授業担当者は次の2点について、考察を行った。

- a) 授業方法のポイントや授業改善のポイントについて（「4つの力」の視点から）
- b) 「4つの力」を対象とした授業評価に対する考察（今年度及び経年変化のグラフをもとに）

(4) FD研修会

授業アンケートの結果をもとに、授業担当者から考察を行ってもらい、その結果を全教員で協議し共有した。

3. 授業アンケートの結果

(1) 「授業アンケート」の結果

図2は、2019年度前期に開講された基礎科目5領域10科目と、地域の教育課題の解決に必要な知識とその実践方法について理論的に学ぶ独自テーマ科目（あおりの教育I・IIの2科目）において実施したアンケート

の回答を領域ごとに集計した結果である。「4つの力」の修得状況にかかる回答を4つの力ごとに合計し（3項目の合計、最大18点）、コース別に平均値を示した。

また、2017年度から2019年度までの経年比較をしたものが図3～図5である。

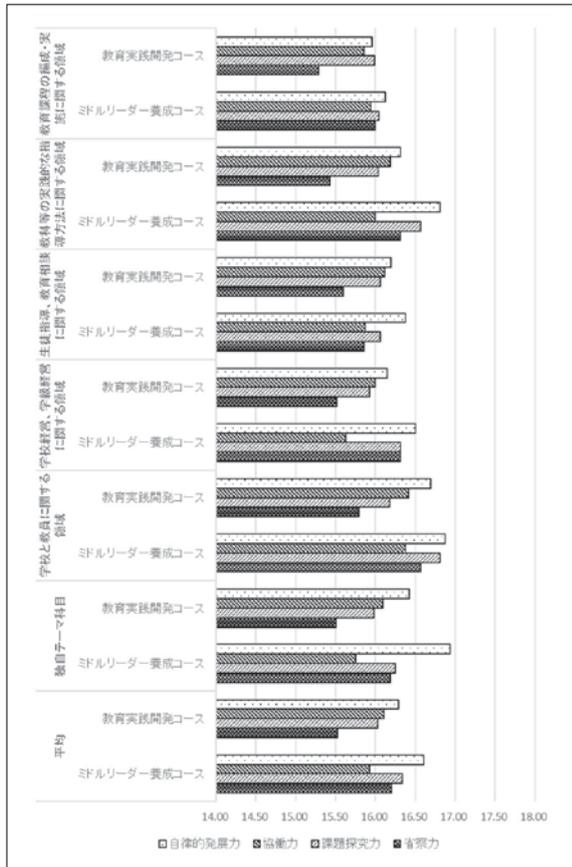


図2 2019年度基礎科目と独自テーマ科目の授業評価

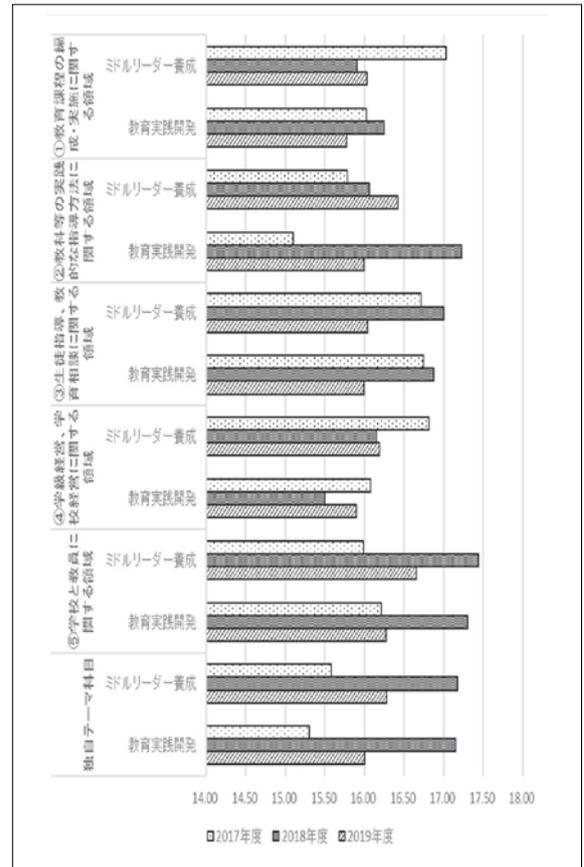


図3 基礎科目と独自テーマ科目の授業評価の経年変化

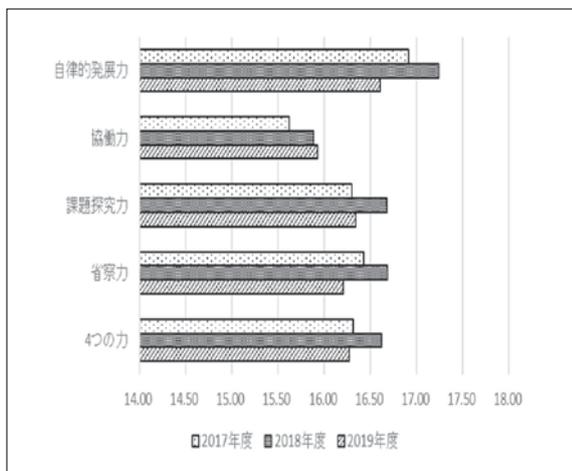


図4 基礎科目と独自テーマ科目の授業評価の経年変化 (ミドルリーダー養成コース)

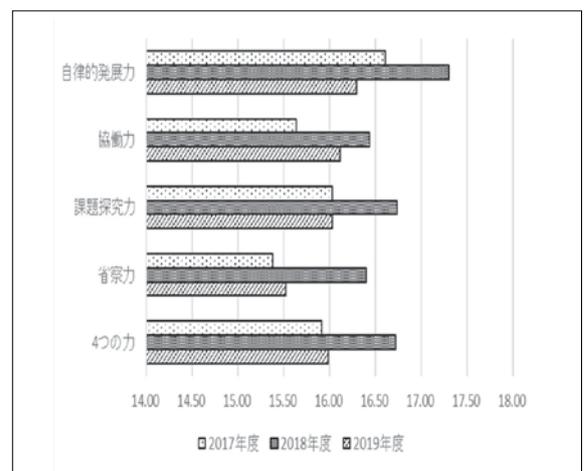


図5 基礎科目と独自テーマ科目の授業評価の経年変化 (教育実践開発コース)

(2) 全体的な傾向

1) 2019年度の結果から

- 全体的に肯定的な評価となっており（最大値16.94, 最小値15.29）、本教職大学院で院生に身に付けさせたい力として掲げている「4つの力」について、本年度開講された授業内容は、院生に対して十分に身に付けさせることができたのではないかと推測される。
- 「4つの力」の内容別の修得状況を比較すると、ミドルリーダー養成コース院生（以下、「ミドル院生」という）、教育実践開発コース院生（以下、「ストマス院生」という）とも「自律的発展力」の評価が一番高かった。自律的発展力は「自らの到達点と新たな課題を明らかにし、その課題解決を目指してさらに職能成長を遂げていく力」と定義されており、ミドル院生にとっては、今までの教員生活を振り返り、今後の職能成長につなげていく良い機会になったのではないかと考えられる。また、ストマス院生にとっては、これからの教員としての心構えを身に付ける機会になったと考えられる。
- 一方で、ミドル院生は「協働力」、ストマス院生は「省察力」が最も評価が低い結果となった。ミドル院生は、他校種のミドル院生や若手のストマス院生との学びの中で、協働的に物事を進めていくことの難しさを再認識した場面が多かったことが影響していることも考えられる。ストマス院生は、今までの学生での学びにおいて、理論と実践の往還の中で省察を求められる経験が少なかったのではないかと考えられる。そういう意味では、本大学院の授業において、他の力に比べると省察力は低い結果となっているが、今後教員生活を送る上で省察の重要性が増してくる中で本大学院の経験が生きてくるのではないかと考えられる。
- 「4つの力」の院生毎の修得状況を比較すると、4つの力全てで、ミドル院生がストマス院生よりも得点が高い状況となっている。これは、ミドル院生の方が、教員としての経験が長く、身に付いている力の差が影響しているものと考えられる。

2) 3年間の経年比較による特徴

- 3年間を通じて、全体的に肯定的な評価となっている。
- 「4つの力」の内容別の修得状況を比較すると、3年間を通じてミドル院生、ストマス院生とも「自律的発展力」の評価が他の力に比べて評価が高かった。
- 一方、ミドル院生は「協働力」、ストマス院生は「省察力」が他の3つの力に比べて3年間を通じて評価

が低かった。

- ミドル院生とストマス院生の比較では、3年間ともミドル院生の方がストマス院生よりも「4つの力」に対する評価が高かった。

4. 授業アンケート結果を踏まえた授業担当者による考察

授業アンケート結果を踏まえて、領域ごとの授業担当者が授業についての反省点や今後の課題について記述したものを以下に記す。

(1) 教育課程の編成・実施に関する領域

a) 授業方法のポイントや授業改善のポイントについて（「4つの力」の視点から）

(1) 教育課程編成をめぐる動向と課題

- 本科目の概要は、田中耕治他『新しい時代の教育課程 第4版』（2018）をテキストとし、教育課程の歴史・思想・構造・原理原則等について実践や事例を交えながら理論的理解を深め、教育課程編成をめぐる諸課題や今後の在り方について議論し考察していくものである。
- 1・2年目は、テキストを分担して「院生が授業」をし、教員がそれぞれの立場から解説や補足説明、現場における事例紹介などをしてきた。様々な工夫が見られ、相互に理解を深める効果は大きかったものの事前準備の負担が課題となり、3年目は「レジュメによる文献講読→院生が論点提示→議論→教員コメント」の過程で展開した。これによって、院生が準備する負担の軽減が図られ、また、院生がよりテキストに即して臨むようになり、議論もより活発になった。事後のアンケートでは、教員からのコメントをもっと聞きたいという声が出ていたので、来年度はレジュメによる文献講読の方法を維持しつつ過程を組み替えて展開する。
- (2) 教育課程の開発と実践
- 本科目の概要は、上記科目での学びをもとに教育課程研究の現状と課題、動向を踏まえて、協働的な演習を通して、理論的な知見を実践と統合しながら検討し、教育課程デザインについて学ぶものである。
- 1時間目に学習指導要領の動向と教育課程編成・開発の必要性について学んだ後、カリキュラムマネジメントの視点、各ミドル勤務校の分析、学校評価の調査、単元配列表による年間指導計画作成、研究主任の役割、健康教育、幼保小連携・スタートカリキュラム、主体的・対話的で深い学びの授業実践例の考察など、教育課程の現代的な課題と視点・方策を取り上げて進めた。これらは、後に多くの院生が実践

研究の具体的な方策として活用しており、理論から実践への橋渡しの役割を担っている。授業展開に当たっては、「本時で培う力」「本活動を通して培う力」などと「課題探究力」「自律的発展力」を提示し、意識付けて展開した。また、作成に時間を要する課題を扱う場合は、作成時間を確保するため授業時間を充てたり期間を空けたりするなど配慮した。

b) 「4つの力」を対象とした授業評価に対する考察 (今年度及び経年変化のグラフをもとに)

1) 今年度のグラフから

- 「4つの力」のうち、自律的発展力がミドル院生16.13、ストマス院生15.96、課題探究力がミドル院生16.04、ストマス院生15.99と他の2つの力より高い評価となっている。これは、科目の特性上、課題発見や分析・実践のデザインなど課題探究力に関わる学習活動が多いことや、その到達点と新たな課題を明確にさせるなど自律的発展力に関わる振り返りをさせたことが理由と考えられる。また、前述のとおり「本時で培う力」「本活動を通して培う力」と提示したことも大きいだろう。
- 協働力については、ミドル院生15.95、ストマス院生15.85で、自律的発展力や課題探究力に至るほどの数値にはならなかった。設問(6)の「自分に期待される役割を果たすことができたか」について実感できなかったのではないかと推察できる。
- 省察力については、ミドル院生16.00に対し、ストマス院生が15.29であった。これは、学習内容に対して基盤となる知識や経験がミドル院生に比べて持ち合わせていないため、設問10「自らの教育実践を、本授業の内容と関連付けて振り返ることができた」などで高い評価を付けられなかったためだろう。

2) 経年変化のグラフから

- ミドル院生の1期生が他に比べて突出し、本科目の学びを肯定的に捉えていたことがうかがえる。
- ストマス院生の3期生が1・2期生より低かった。基盤となる知識や経験の個人差が考えられる。授業打合せの際に、院生情報についても確認し、学習内容や展開の配慮について検討して臨みたい。

(2) 教科等の実践的な指導方法に関する領域

a) 授業方法のポイントや授業改善のポイントについて (「4つの力」の視点から)

(1) 教科領域指導研究

本授業は「何をどう教えるのか」の「何を」に当たることを扱っている。授業の前半7回は教職大学院院生全員で行い各院生が担当する科目が学習指導要領上どのように書かれているのかを捉えるようにしてい

る。授業では院生の多忙感を軽減するために、原則宿題は出さないこととし、授業中に課題を出しiPad等で文科省のHPを調べ、自分の考えをまとめ、グループで協議するというパターンを取った。課題例は以下のとおりである。

「自分の教科での「主体的な学び」「対話的学び」「深い学び」の捉え方を学習指導要領解説書で確認し、その具体例を子どもの姿として挙げよ」

「各教科領域の学習において深い学びの鍵となる「見方・考え方」を児童・生徒に習慣付けるために教師は日常の授業でどう行動すればよいのかを考えよ」

授業の後半7回は、学部教員をゲストティーチャーに招いて各教科に分かれ議論を重ねた。最後の1回は各教科でどのようなことを学んだのかを共有するための授業とした。

上記のことを通して、各院生が担当している教科の課題はどのようなことであるのかを捉える(課題探究力)、他教科担当者と学校として担当する教科の独自性と共通性を議論する(協働力)、これまでの自分の実践を反省する(省察力)、今後の自分の教科指導の在り方を考える(自律的発展力)という力を育成するようにした。

(2) 学びの様式と授業づくり

本授業は「何をどう教えるのか」の「どう教えるのか」に当たることを扱っている。授業では、まず、授業方法は子どもの実態・授業の目標によって臨機応変に変更できることが重要であることを押さえた上で、学習意欲の向上、学習障害への対応、ICT教育の在り方、授業形式、討論を取り入れた授業について考えるようにしている。また、実務家教員だけでなく、授業方法の研究者(森本)のコメントを随時入れるようにし研究的な視点を取り入れるようにした。また、授業ではできるだけグループディスカッションを取り入れるようにした。

こうしたことから、議論を通して(協働力)、各自の授業実践に関わる課題は何かを捉える(課題探究力)、これまでの自分の実践を反省する(省察力)、今後の自分の授業方法を考える(自律的発展力)という力を育成するようにした。

b) 「4つの力」を対象とした授業評価に対する考察 (今年度及び経年変化のグラフをもとに)

ミドル院生については、年を経るごとに評価が高くなっている。これは授業内容を改善していった成果であると考えられる。改善の方向としては、授業内容の精選化、2つの科目の違いの明確化、特に「教科領域指導研究」では宿題を出さず、授業内で完結するようにし

た等が挙げられる。

ストマス院生では2年目の評価が飛び抜けて高いがこれは標本数が5と少ないこととそれに伴い授業での関わりが高かったことが要因として考えられる。この2年目を抜かしても1年目よりは3年目の方が評価が高いので、上記の改善の方向の成果は出ていると考えられる。

4つの力の項目で観ると、ミドル院生は協働力の評価が低い。これは、グループでの協議で他者を納得させられる意見を言えたか、共同作業で何かを完結できたか等について厳しい自己評価をしていることが一つの原因と考える。

一方、ストマス院生では省察力が低い。これは、授業実践の絶対数が少なく、省察するべきものが少ないことが原因として考えられる。

なお、こうした数値には表れないが、授業研究等が校内研に位置付いていることが少ない高校教員に対して学習指導要領の意義に基づいた授業改善の在り方を考えるきっかけとして本領域がどのように貢献できるのかを考えることは今後の大きな課題であると授業での院生の様子から考えられる。

(3) 生徒指導、教育相談に関する領域

a) 授業方法のポイントや授業改善のポイントについて（「4つの力」の視点から）

- 不登校、いじめや特別支援教育に関する事例を全ての院生から提供してもらい、協議をしていく中で、様々なグループ編成や検討の仕方を工夫した。事例を準備する段階で、今までの自分の取組について省察することを促されるとともに、何が問題なのかについて課題探究が進んだのではないかと考えられる。また、授業の中でグループ検討する場面では、どのように協働して課題解決していくのかについての議論が深まったように思われる。授業を通じて生徒指導や教育相談に対する力量の育成が図られ、自律的発展力の育成につながったのではないかと考えられる。さらに事例検討の最後に、実務家教員、研究者教員のそれぞれの立場から、事例に対する助言を行ったことで多様な視点から再度振り返ることができたことも重要なポイントとなったのではないかと考えられる。
- 事例検討を行った次の時間に、まとめの資料を作成し、振り返りの時間を取ったことで、事例に対するさらなる省察に繋がったのではないかと考えられる。
- 教員が主体となって行う授業では、生徒指導や教育相談の今日的な課題を取り上げ、具体的な実践場面

の紹介や理論的な知見を提供することで、「4つの力」の育成にもつながったのではないかと考えられる。

b) 「4つの力」を対象とした授業評価に対する考察（今年度及び経年変化のグラフをもとに）

- 2019年度の授業評価では、「4つの力」全てで高い評価を頂いた。特にミドル院生、ストマス院生ともに自律的発展力の評価が一番高かった。生徒指導・教育相談に関する領域は、教科指導とともに、学校における教育活動の両輪であり、院生の関心も高く、自らの問題として考えることができたことによって評価が高かったと思われる。一方で、ミドル院生では協働力の評価が一番低かった。学校現場とは違う人間関係の中で様々な協議を行ったため、目指すべき協働性について課題を感じた場面があったことも考えられる。また、ストマス院生は省察力の評価が一番低かった。ストマス院生は生徒指導の経験が少なく経験に基づいた省察を行うことが難しかったのではないかと推察される。
- 3年間の経年変化を見てみると、ミドル院生は自律的発展力が高く、協働力が低い傾向があり、ストマス院生は自律的発展力が高く、省察力が低い傾向が見られた。大学院での新しい学びを得たことで、自律的発展力の向上が見られたのではないかと考えられる。一方で、ミドル院生の課題は協働力であり、今後、様々な協働の形態を試みることで向上を図っていきたい。また、ストマス院生の課題である省察力についても、省察の視点を明らかにして、さらなる深い省察が行えるように取組を強化していきたい。

(4) 学級経営、学校経営に関する領域

a) 授業方法のポイントや授業改善のポイントについて（「4つの力」の視点から）

- ミドル院生にとっては、教育行政とのつながりを実習を通して学んだことと、理論が結び付き、興味をもって学ぶことができた。反面、ストマス院生にとっては、教育行政そのものをあまり理解していないことや学校現場との関わりが分からないため、どうしても理論的な視点でしか理解できなかった。
- ただ、ミドル院生とストマス院生と一緒に学習することにより、ミドル院生のリーダー性が構築できたことと、ストマス院生の協働性が構築できたことは大きな成果である。
- 学校経営に関わっては、ストマス院生は理論的な学習が中心であったが、ミドル院生と一緒に学習することにより、学校現場の様子をよく理解でき、学びが深まっていった。また、ミドル院生はこれまでの経験値を振り返りながら、よりよい学校経営の在り

方を模索することができた。

- 省察活動により、より深い学びと学級経営、学校経営の改善点を出し合い、自己の目標設定が明確になってきた。今後も省察活動に力を入れる必要がある。

b) 「4つの力」を対象とした授業評価に対する考察 (今年度及び経年変化のグラフをもとに)

- 自律的發展力はミドル院生もストマス院生も高い数値を表している。これは教員として自らの能力を高めようとしている意欲の表れであると感じる。また、省察力については、ミドル院生が高く、ストマス院生が低い数値になっている。これは教職の経験値差によるもので、どうしてもミドル院生の経験に頼った授業を行わざるを得ない状態だったためである。
- ミドル院生の協働力は低い数値になっているが、これはミドル院生が授業をリードし、自らの経験値を話す機会が多いため、自身の学びが低くなり、ストマス院生からの学びに期待できなかった点にあるためである。ストマス院生の感じ方や創造力を授業の前面に出す工夫も考える必要がある。

(5) 学校教育と教員の在り方に関する領域

a) 授業方法のポイントや授業改善のポイントについて (「4つの力」の視点から)

「現代の学校と教員をめぐる動向と課題」

- 教育社会学の理論に基づく現代的教育課題の理解の深化(自律的發展力)を目的の中心とし、グループでテキストの内容に関する質問への回答と論点整理(協働力)をおこない、論点に基づき議論を行い(課題解決力)、授業後に自身の学校・教員の在り方を省察すること(省察力)を目的として行っている。
- 2018年度から報告担当者が担当教員にテキストの内容についての質問を受け付ける機会を設けてきた。一方、受講生の工夫により、質問への回答を中心にした発表ではなく、内容のまとめと関連付けて質問に答える発表の形にシフトしてきており、次年度以降はそのスタイルを基本とすることも検討中である。加えて扱う内容を「教育における社会的包摂」に一部移して、全体を振り返る機会を設けることも検討中である。

「教育における社会的包摂」

- インクルーシブ教育システム構築や低所得者層を含むマイノリティに対する教育についての基本的理解(自律的發展力)をもとにしながら、ゲストスピーカーによる講義やグループによる事例検討(協働力)などを交えながら、課題解決の在り方(課題解決力)や自らの実践との関わり(省察力)を考察している。

- インプットとアウトプットとのバランスに配慮してきた他、同じ事例を授業のはじめとまとめに検討することによる見識の広がり意識化などの工夫を行ってきた。なお、開講時期については今後検討が必要と考える(前期終盤での集中でタイトな日程のため)。

b) 「4つの力」を対象とした授業評価に対する考察 (今年度及び経年変化のグラフをもとに)

「現代の学校と教員をめぐる動向と課題」

- 相対的に「自律發展力」は一定程度の値をミドル院生・ストマス院生ともに示している。課題解決力と省察力は総じてストマス院生の値が低い傾向にあり、また2019年度については協働力も低い傾向にある。教育実践経験の少ないストマス院生にとって、課題解決や教育実践との関わりで考えることが難しいことは、ある意味仕方ないことのように思われるが、担当教員としては教育実践とのつながりを意識した指導・助言を心掛けたい。

「教育における社会的包摂」

- 少なくとも「現代の学校と教員をめぐる動向と課題」に比べると、全体として値は高い。ただし、「現代の学校と教員をめぐる動向と課題」同様に、ストマス院生の課題解決力と省察力が低い傾向にある。2019年度についてはミドル院生・ストマス院生ともに低い傾向にあるため、シェアリングの在り方についての工夫が必要と考える。

(6) 独自テーマ科目 あおもりの教育 I (環境) に関する領域

a) 授業方法のポイントや授業改善のポイントについて (「4つの力」の視点から)

「新たな発見」をどう生かしていくかがキーワードになると考えている。

「自律的發展力」については「環境」を多様な観点から見ることを通して「新たな発見」ができることでさらに高まると思われる。体験を通しての発見、未知の分野に踏み込んだ発見ができるよう、授業内容による時間配列の工夫、フィールドワークの3回以上の設定、授業者教員の継続とゲストティーチャーの活用を図りたい。

「協働力」については学びを共有する時間の不足が院生から指摘されている。15回目の授業でグループに分け授業の省察と意見交換を行って十分とする院生の方が多いのであるが(多くの活用できる知識を得たいため)、3コマ連続の場合や授業内容が変わったときなどにグループワークなどを取り入れていきたい。

「課題探究力」においては、特にミドル院生は、「新たな発見」を生かす教育実践の場として総合的な学習の時間を念頭に置いている。「新たな発見」を総合的に組み立てる教育実践力が身に付いているからかと考える。ストマス院生については自身の教科領域の中で消化しようとする傾向が見られることから、毎回提出させている省察シートに授業者への質問を書かせそれに答えていただくことを行っている（その場での質問は厳しい）。授業者からは直接本人にメール等で答えていただいている。

「省察力」については最終レポートにおいて、各専門家の講義、フィールドワークでの体験、グループでの意見交換などを踏まえてどのように現場での教育活動に生かすのか指導計画を提出させているが、特に、テーマや時間配分等を自由にして、理想的なあるいは挑戦してみたい指導計画を立てるようにさせている。省察が原動力となって「新たな発見」が「新たな授業実践」を生み出し、他の3つの力につながっていくようにさせていきたい。

b) 「4つの力」を対象とした授業評価に対する考察 (今年度及び経年変化のグラフをもとに)

各コースともに評価が目立って低い(5.1, 昨年5.3)のが「協働力」における「グループワークにおいて自分に期待される役割を果たすことができた」の箇所。一方で「協働力」の「他の人の多様な意見について尊重することができた」は目立って高い(5.7, 昨年6.0)。「協働力」全体を見れば低くはなく、講義・フィールドワーク中心の授業形態からきているものといえる。

コースで差が見られたのは「省察力」。ミドル院生が高くストマス院生が低い。他領域同様、省察力の基盤となる教育実践の差から来るものと思われる。この差ほどではないが「自律的発展力」も同様の理由から見られる。

「4つの力」合計の経年比較においては、2018年度の評価の高さは別として、初年度の2017年度と比較して2019年度の評価が高くなっている。上記授業改善に向けて取り組んできたことによるものと考え。

(7) 独自テーマ科目 あおもりの教育Ⅱ(健康)に関する領域

a) 授業方法のポイントや授業改善のポイントについて(「4つの力」の視点から)

- 本科目は青森県の教育課題「健康教育(短命県返上)」に対応する独自テーマ科目の一つであり、その開講様式として「オール弘前大学」を目指し、教育学部のみならず、医学部・農学生命科学部の教員との協働での開講となっている。児童生徒の抱える健康課

題について、医学・農学生命科学のそれぞれの分野の最新の研究成果などを提示しながらの授業内容となっていた。

- ストマス院生にあつては、教員免許取得単位上、健康教育は必修ではなく、ミドル院生においても健康教育についてじっくりと学んだ経験は少ない。両院生において「自らの教育実践を本授業と関連づけて振り返ることができた(課題探究力)」が2019年度の授業評価では同点であり、教職経験にあまり左右されることなく、両院生双方において教育課題の新たな学びの分野であったと考えられる。
 - 一方、「協働力」は(ミドル院生 5.1 ストレート院生 4.9)とやや低い傾向が見られた。授業改善のポイントとして、討議や演習の時間を十分に取る必要があることが示唆された。
- #### b) 「4つの力」を対象とした授業評価に対する考察 (今年度及び経年変化のグラフをもとに)
- 4つの力の視点での今年度のおもりの教育Ⅱの授業評価は、ミドル院生とストマス院生において大差はなく(最大0.2ポイントの差)、また、4つの力それぞれの値も大きな差は見られず(最大0.3ポイントの差)、まんべんなく4つの力が学ばれていたという評価であった。
 - 健康教育に関して青森県のデータをもとに科学的根拠を示した講義内容が多くあったので、健康教育に関する理解は深まり、興味関心が高まり、教育実践に向けた新たな課題を見つけている様子が見えたと。
 - 独自テーマ科目の経年変化からは、それぞれの年度の平均値に差が見られることが推察され、3年間の経年変化として読み取れる特徴は言及しにくいと思われる。

5. おわりに

本稿では、教員の授業力向上、院生の専門性を高めるための授業改善を目指したFD活動について、授業アンケートの結果をもとに考察を行ってきた。

領域ごとの考察を概観すると、4つの力を意識した授業方法や授業改善の報告が見られる。また、授業アンケートの結果から、両コース院生の自律的発展力の高さや、ミドル院生の協働力の低さ、ストマス院生の省察力の低さなどについての考察が、領域ごとの授業方法の特性と絡めて行われている評価できるのではないだろうか。一方で、教員の中でも4つの力に対する理解が十分になされていない点も見られ、十分な考察がなされていないという指摘もできる。

まだ、取組は始まったばかりである。今後、授業アンケートのさらなる見直しを行い、院生が授業で身に付けた専門性を適切に測りながら、授業担当者が4つの力の視点から考察することで、授業改善を行うためのFD活動を積極的に実施していくことが求められる。

注

- (1) 「平成29年度弘前大学教職大学院案内」パンフレット中「いま、教員に求められる力」(p.1)を参照。
- (2) 「弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻「設置の趣旨等を記載した書類」を参照。

引用文献

中央教育審議会 (2015). これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(答申)

https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf 2019/10/1 閲覧

片山紀子・宮野純次 (2010). 教職大学院における授業改善・FD活動－京都教育大学大学院連合教職実践研究科の事例検証－ 京都教育大学紀要 116, 23-35.

石上靖芳・山崎保寿・原田唯司・渡辺明広 (2010). 教職大学院における授業改善・FD活動－静岡大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻の取組－静岡大学教育実践総合センター紀要 18, 137-145.

三浦智子・上野秀人・吉原 寛 (2019). 教職大学院における教員の職能開発とその効果検証の方法―「授業アンケート」の可能性と課題― 弘前大学教育学部紀要 121, 189-198.